

## ハリー・ポッターとナルニア国物語をめぐる 議論についての覚書

加藤 知子

### はじめに

『ナルニア国物語 / 第1章：ライオンと魔女』は、2005年12月9日にアメリカで公開され、「封切られるや『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』を抜いて、堂々のNO.1ヒット」と日本版オフィシャルサイト<sup>1)</sup>では伝えている。

同じファンタジーに属しながら、『ナルニア国物語 / 第1章：ライオンと魔女』に関しては、ハリー・ポッターシリーズに見られるような議論<sup>2)</sup>はキリスト教徒の間には見られない。ハリー・ポッターシリーズには、キリスト教的要素を見出すことは、容易ではない<sup>3)</sup>のに対し、『ナルニア国物語』の著者C.S. Lewisは『キリスト教の精髓』等、一連のキリスト教関連の著作を持つプロテスタント信者であり、キリスト教の価値観と融合する（少なくとも相反することはない）作品群を生み出していることを鑑みれば、『ナルニア国物語』の評判がアメリカの福音主義者の間で上々だというのは、当然のように思われるが、『ナルニア国物語』がキリスト教的であるから好意的に受け入れられ、ハリー・ポッターシリーズがキリスト教的でないので非難される、とするだけでは、単純すぎると言わざるを得ない。両者には類似点も見られるし、『ナルニア国物語』には、通常いわゆる福音主義者たちが受け入れることはない神学的な立場も反映されているからである。また、加藤（2005）で言及したように、アメリカのキリスト教徒の間で、ある著作なり映画なりが議論の中心となる場合、それ

らがキリスト教的か否かという宗教的な視点だけではなく、倫理的な視点も考慮に入れながら整理することが必要である。この小論では、ハリー・ポッターシリーズと『ナルニア国物語』の類似点・相違点をまとめ、同じ子供向けファンタジーでありながら、一方で、ナルニア国物語はアメリカの福音主義者たちには好意的に受け入れられ、他方で、ハリー・ポッターシリーズは批判的に受け止められているのはなぜかという間に、宗教的および倫理的な視点からアプローチすることを試みる。最後に、『ナルニア国物語』に、通常の福音主義とは相容れない神学的な立場も含まれていながら、その点が議論的になっていないという点に言及し、本稿のまとめとしたい。

## 1. ハリー・ポッターシリーズと『ナルニア国物語』の類似点

ハリー・ポッターシリーズ、『ナルニア国物語』共、ファンタジーに属するという点の他、次のような類似点が認められる。

	ナルニア国物語	ハリー・ポッターシリーズ
1	ナルニア国への入り口は、『ライオンと魔女』では、ロンドンからの疎開先である屋敷の中の衣装だんすである（『ライオンと魔女』以外の物語では、他の入り口も示されるが、いずれもイギリス）。	hogwarts行きの列車用プラットフォームへの入り口が、イギリス（ロンドン）のキングス・クロス駅にある。魔法の世界自体は、他の場所からも行くことができる。
2	主な登場人物は子どもたちである（ナルニア国に行ってから、アスラン、ナルニア人等、子どもたち以外の登場人物も活躍）。	主な登場人物は子どもたちである（hogwartsでは、イギリス人以外の人間や、様々な生物、死霊などが登場）。
3	子どもたちは冒険や試練を経験する。戦闘シーンもある。	子どもたちは冒険や試練を経験する。戦闘シーンもある。
4	ナルニア国の人々の助けを借りながら、最終的に悪を倒す。	友達の助けを借りながら、最終的に悪を倒す。
5	魔法という言葉が登場する。	魔法という言葉が登場する。
6	キリスト教から見た異教の要素が存在する。	キリスト教から見た異教の要素が存在する。
7	冒険・試練の後、元の世界（イギリス）へと子どもたちは帰る。	冒険・試練の後、元の世界（魔法の世界ではない、マグルの世界）へと子どもたちは帰る。

表 1

両者共に、主な登場人物は子どもたちであり、「実在する私たちの世界とは

別の世界を物語る・・・『異世界ファンタジー』とか『第二の世界のファンタジー』などと<sup>4)</sup>呼ばれる作品である。更に、『ナルニア国物語』の中の『馬と少年』に出てくるシャスタは、ハリー・ポッターシリーズのハリーと生い立ちなどの点で、類似点が際立っている（ただし、シャスタはもともとナルニア側（その近辺にアーケン国やカロールメン国があるのだが）の住人であり、イギリスとナルニア側とを行き来するという設定にはなっていない）。

	シャスタ	ハリー
1	物語の最初では、両親がいないことになっている。	両親が既になくなっていく。
2	育ての親（アルシーシュ）は見るに耐えないほど嫌な男。	育ての親（叔母さん夫婦）は見るに耐えないほど嫌な家族。
3	シャスタは奴隷状態。	ハリーは奴隷状態。
4	シャスタの父は実は王だったことがわかる。	両親は実は英雄だったことがわかる。
5	カロールメンで育ったが、そこに属するのではなく、アーケン国がシャスタにとって、本来の国である。	マグルの世界に育ったが、そこに属するのではなく、魔法の世界がハリーにとって、本来の世界である。

表 2

ただし、微妙な相違点もある。『ナルニア国物語』では、子どもたちがナルニアの国に行くためには、アスランに導かれる必要があるというのに対し、ハリー・ポッターシリーズでは、 hogwarts は学校なので、子どもたちは学期中しか行くことはないのだが、魔法の世界自体は、普通の世界（マグルの世界）から、望む時に行くことができる。例えば、『ハリー・ポッターと賢者の石』では、ハグリッドが酒場裏の壁を傘でつつき、魔法の世界に通じる拱道を開いている。

この違いは微妙であるが、両作品の提示する世界観の違いを反映しており、興味深い。すなわち、『ナルニア国物語』では、子どもたちは、ナルニアへ行くことを望むことは可能だが、自らの望みどおりにアスランを動かし、ナルニアに導き入れてもらうことは不可能であり、そこに、人間の存在を越えた超越者の働きを読者は感じることになる。一方、ハリー・ポッターシリーズの方は、

自らの意思と鍛錬によりその移動が可能であり、読者は、超越者の働きというより、自分の希望は自分で叶えるものというメッセージを受け取ることになる。

もう一つの微妙な違いは、魔法という言葉である。ハリー・ポッターシリーズにおける魔法とは、呪文・占い・占星術・降霊術・数秘学などを指しているが、『ナルニア国物語』で使われている〈魔法〉という言葉は、これらのいわゆる魔法ではなく、人間を超えた存在であるアスランによる働きを指す。例えば、前述のとおり、ナルニア国に受け入れられるためには、アスランによる導きが必要だが、これを『銀のいす』の登場人物の一人、ユースチスは「魔法」と呼んでいる<sup>5)</sup>。このように、『ナルニア国物語』・ハリー・ポッターシリーズ共に〈魔法〉という記号を用いていても、その意味するところ、すなわち、シニフィエが異なるために、前者は福音主義者たちのあいだでは問題にならず、後者は非難的となるということが言えよう。

検討を要するのは、表1の第6項であるが、この点については、第3章で触れる。その前に、ハリー・ポッターシリーズと『ナルニア国物語』との間の、明らかな相違点についてまとめておきたい。

## 2. ハリー・ポッターシリーズと『ナルニア国物語』の明らかな相違点

『ナルニア国物語』とハリー・ポッターシリーズの間に見られる明らかな相違点は以下のとおりにまとめられる。

	ナルニア国物語	ハリー・ポッターシリーズ
1	ナルニアは、キリスト教的なものを感じさせる。ナルニアの同盟国アーケン国も、アスランに従う者の国である（アスランは、読者にキリストを思い起こさせる）。	魔法の世界（ハリーが本来属すべきところ）は、キリスト教と相反するものを感じさせる。
2	ナルニア国・アーケン国と敵対するカロールメン国は、ナルニア国とアーケン国とは正反対の国、すなわち、キリスト教とは相反するものを感じさせる国である。	マグルの世界は、魔法の世界とは正反対の世界、すなわち、キリスト教徒（魔法使いたちと対立した人々）を感じさせる国である。
3	さまざまな生き物が、アスランを頂点として一つのユニバースを形作る。	基本的に人間が中心の物語。人間以外の生物は、単なる脇役のようである。

4	アスランの定めた秩序に従う者が勝利する世界。	強い者が勝つ世界。
5	ウソや、盗みは見られるが、話が進むに従って、登場人物の人格の陶冶が見られる。	ウソをついたり、盗みをしたりする回数が半端ではない。
6	裁きは行われる。	悪さをしても厳しく罰せられない。
7	敵に対する、哀れみや情け、赦しが見られる。	敵に対して哀れんだり、情けをかけた、赦したりする行動は見られない。
8	子どもたちは強くなるし、人格も陶冶される。	ハリーは強くなるが、人格の陶冶というものは見られない。
9	悪い言葉遣いは見られない。	言葉遣いが良いとはいえない（例えば、殺してやるぞ！という言葉の使用頻度は極めて高い）。

表 3

表 3 の 1 ～ 4 は、どのような世界観が描かれているかに関わる事項である。C.S. Lewis は、イエス・キリストの話をイエス・キリスト＝アスランというように、象徴によって書こうと思ったわけではないと断った上で<sup>6)</sup>、『『もしもナルニアのような国があったとして、その国を救う必要があったとしたら、そして神（海の向うの大帝）の子が、ちょうどイエスがわたしたちの贖いのために地上にこられたように、ナルニアを贖うためにそこをおとずれたとしたら、その世界ではどんなことが起こるだろうか？』と考えた<sup>7)</sup>と明言していることから、『ナルニア国物語』の一連のエピソードを読んだ読者が、そこからキリスト教のメッセージおよびキリスト教的世界観を引き出したとしても不思議ではないし、むしろ、そのほうが自然であるとも言えよう（ただしこれは、そのような読み方のみを採るべきだと本稿筆者が主張するものではない）。

一方、ハリー・ポッターシリーズでは、魔法を使う国が魅力たっぷりに前面に押し出され、その魔法の世界と敵対してきた世界、つまり魔女狩りなどの歴史を通じ、魔法使いたちを迫害してきたとされるキリスト教界が、マグルの世界、すなわち、魔法がなく面白みに欠け、かつ、ハリーにつらくあたる伯父・伯母夫婦や従兄弟が住む殺伐とした世界とオーバーラップされ、読者をして、キリスト教に対して不信感を抱かせしめているような印象を受ける。ハリー・ポッターシリーズをバネに、親魔術（従って反キリスト教的 — キリスト教で

は魔術を禁じているため) のプロジェクトやディスカッションをクラス内で進められるよう、教師に素材を提供する書物もあることから<sup>8)</sup>、ハリー・ポッターシリーズが提示する世界観とは、基本的に反キリスト教的であると結論を出してよいだろう。

このような宗教的世界観の違いが、『ナルニア国物語』とハリー・ポッターシリーズとでは、キリスト教福音主義者たちの間での受け止め方に温度差があることの理由の一つであると言えよう。

表3の5～9までは倫理に関する項目である。ハリー・ポッターシリーズとロード・オブ・ザ・リング三部作の、福音主義者たちによる受け入れられ方が異なる理由の一つに、後者は高い倫理観に裏打ちされている一方、前者にはそのような点が見られないというものがあった<sup>9)</sup>。表3でまとめたように、倫理という点で『ナルニア国物語』とハリー・ポッターシリーズとの違いは明らかである。特に高い倫理観を理想とするアメリカの福音主義者たちが『ナルニア国物語』をすんなりと受け入れるのに対し、ハリー・ポッターシリーズに対しては、異議を唱えるのは当然と言えるであろう。ハリー・ポッターシリーズは、一見、単純な善対悪の対決に見えるが、注意深く読んでみると、善であり英雄であるはずのハリー・ポッターによる英雄らしくない振る舞いはかなりある。例えば、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』では、次のとおりである(ページ数は英語ペーパーバック版)。

ページ	行	ハリーの英雄らしからぬ行い
12	01～03	魔法を使うと見せかけて、マグルの少年がそれを見て慌てふためくのを楽しむ。
12	32～33	嫌味を言う。
13	08～09	呪文らしきものを口にして、マグルの少年をからかう。
44	12～13	父親にしかられて赤面し、怒っている同級生を見て喜ぶ。
56	04～07	未成年の魔法使いはマグルの世界で魔法を使ってはいけないことになっているが、自分で状況を勝手に判断して、魔法を使ってしまう。
57	35～36	すぐに飽きてしまう。

65	11～13	先生に理屈をこねる。
70	09	迷惑をかけた人たちのことをすぐに忘れてしまう。
82	35～36	いつでもどこでも話しかけてくる下級生をなんとかふりきろうとする。
85	06	嘘をつく。
91	23～24	先生に口答えする。
97	02	管理人に口答えする。
97	24～26	管理人宛の手紙を盗み見する。
98	30	嘘をつく。
103	27	嘘をつく。
105	13～14	killという言葉を知り、恐れとわくわくした気持ちの両方を感じる。
108	13～16	殺された猫の飼い主は気の毒だが、退学になりそうだった自分はずっと大変だったと思う。
109	25～26	嘘をつく。
120	08～19	証拠もないのに、ある学生が犯人だと疑う。
120	24	学校の規則を破ることも厭わない。
124	12～14	嘘をついて本を図書館から持ち出す。
133	09～10	絞め殺すぞと脅す。
140	35～36	鼻がメロンのようにふくらんでしまった生徒を見て、笑いをこらえる。
141	07～08	騒ぎを起こしたのに白を切る。
143	01	人が倒れても、それが気に食わない人物なので、かわいそうだと思わない。
143	24～26	ある女子生徒のことを、『醜い老婆との休日』の中に出てきた写真、と形容する。
143	38～40	相手を倒すために、決闘のきまりを破る。
147	34～35	自分も他人のことを疑っているのに、反対に自分が他人に疑われると、疑っているほうが馬鹿だと思ふ。
154	18～19	校長先生の部屋にある帽子をこっそりかぶる。
157	01	上手く説明できないので嘘をつく。
158	08	決闘の練習をする。
161	02	靴を盗む。
178	25	廊下では魔法は使ってはいけないが、使ってしまう。

188	30～31	上手く説明できないので、部屋が荒らされたことを先生に言わない。
190	01～02	先生に口答える。
192	03～04	外出が禁止されている状況で、内緒で外出できるように、姿が見えなくなる外套を用いる。
192	06～07	学校を内緒で抜け出す。
211	01～02	学校で学んでいることは試験されるに値するほど有益であるとは思っていない。
213	35～37	嘘をつく。
214	35～36	先生に内緒で、紙切れを手にしようとする。
216	39～40	職員室に隠れて、先生の話をごっそり聞く。
221	17～18	嫌な人物が震えているのを見て喜ぶ。
249	36～39	嫌な先生が学校を去ったので、うれしいと思う。

表 4

物語を読むにあたり、読者は、主人公と自分を重ね合わせるため、ハリー・ポッターシリーズを読んだ後、自分もハリーのようにになりたいと考える子供たちが、ハリーのこのような行動を真似るようなことがあつては大変だ、という危機感を抱き、かつ、たかが子供の読み物なのだから、これぐらいのことは許されるだろうというような甘さのない親たち(福音主義者に多い)が、ハリー・ポッターシリーズに対して否定的になっていると思われる。

### 3. 『ナルニア国物語』に見られる、いわゆる異教の要素について — 結語にかえて

前章では、『ナルニア国物語』がキリスト教徒たちに支持される要因として、キリスト教的世界観と高い倫理観の二つを確認した。ハリー・ポッターシリーズは、『ナルニア国物語』とは対極の世界観を提示し、倫理観も高いとは言えないがゆえに福音主義者たちの非難的になるというのは、わかりやすい構図であるが、奇妙なのは、『ナルニア国物語』もハリー・ポッターシリーズと同様、



いわゆる異教の要素は含まれているのにも拘らず、その点が議論的になっていないという点である。

『ライオンと魔女』だけをとってみても、フォーンやセントール、木の精など、キリスト教によって凌駕される以前のヨーロッパ神話のキャラクターが現れる。また、魔女ジェイディスは自分に従わぬ者を石に変えてしまうが、これ(石化症)も、ヨーロッパの神話ではよく見られるものである。セントールはハリー・ポッターシリーズにも登場するし、石化症のアイディアも、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』の中で用いられている。

ハリー・ポッターシリーズに関しては、キリスト教が認めない異教の世界が展開されており、それに影響された子供たちがキリスト教から離れるのではないかという危惧から、アメリカ福音主義者たちが非難の声を上げたのではなかったのか<sup>10)</sup>。それならば、『ナルニア国物語』に出てくるキリスト教以前の異教のモチーフに刺激され、キリスト教から離れる子供がいるのではないかと心配する福音主義者が見られないのはなぜなのか。『ナルニア国物語』では、異教のモチーフは、キリスト的存在であるアスランの下に再構成されており、元もとの異教どおりのものではないので大丈夫だと主張することも可能だが、ハリー・ポッターシリーズにおいても、〈再構成〉はなされており(キリスト教という視点での再構成ではないが)、元来の異教そのものがそこに展開されているわけではないのである。

『ナルニア国物語』に異教の要素がちりばめられているのは、作者の C.S. Lewis の信仰のあり方に鑑みれば、奇妙なことではない。彼は、「クリスチャンであれば、あらゆる宗教は、どんなに変てこな宗教でも、少なくとも真理を暗示するようなものを多少は含んでいる、と考えていっこう差し支えない」<sup>11)</sup>し、また、「神は人類に・・・『善い夢』を送りたもうた。善い夢とは、もろもろの異教に見られるあの奇妙な物語—神が死んで生き返り、その死によって、人間に新生命を与える、という・・・物語のことである」<sup>12)</sup>と考えていた。

すなわち、異教の神々を「歴史において成就する真のキリストの予表」<sup>13)</sup>と捉えていたのである。

異教を信じる人々の救いに関する C.S. Lewis の信念は、『さいごの戦い』のカロールメン国人エーメスが、アスランを信じていなかった、否、その名を憎んでいたにも拘らず、善きものを求め続けたがゆえにアスランに導かれる、という展開によく現れている。これは、「キリスト・イエスを知らずに一生を送った人々の救いの可能性についての肯定的提示である」<sup>14)</sup>といえる<sup>15)</sup>。

キリスト教以外の宗教の信者であっても、真心を尽くして神々に帰依するならば、真心を尽くすというのは、善きことであり、善きことはことごとくイエス・キリストに帰するものであるため、結局はキリストによって救われるのだという考え方を包括主義というが<sup>16)</sup>、これは、プロテスタント自由主義に見られるものであって<sup>17)</sup>、福音主義者はここから距離を置くことが多い。『ニューエイジの罨』p.100 - 101 では、聖書ローマ人への手紙第 1 章 21 節から 23 節に言及しつつ、「諸宗教とはまことの神に背を向けて、あらぬ方へ向って架けられたはしごであるというのが聖書の主張である。仮に表面的な類似性はあったとしても、救いのためには無益なはしごである」<sup>18)</sup>と、福音主義の、異教に対する否定的な見方を強調している。実際、このような立場を取るからこそ、福音主義者たちはハリー・ポッターシリーズに対して厳しい態度で臨むのではなかったか。それにも拘らず、C.S. Lewis の異教に対する見方に関して福音主義者間で議論が活発に行われたいのはなぜなのだろうか。

その理由として考えられるのは、キリスト教徒内での亀裂を避けるというのが考えられるが、これにはあまり説得力が感じられない。実は、キリスト教徒の中にはハリー・ポッターシリーズを支持する一群も存在する。例えば、*What's a Christian to Do with Harry Potter?* の著者 Connie Neal は十年にわたり若者に向けての伝道に携わってきた熱心なキリスト教徒であるが<sup>19)</sup>、同著の中でハリー・ポッターシリーズを擁護するとともに、同シリーズをめぐる福

音主義者の間での亀裂が深まることに懸念を示している<sup>20)</sup>。しかしながら、依然としてキリスト教徒内で一致した意見が出される気配はない。通常、福音主義者は、福音主義の純粋さを追求するためには労を惜しまない。よって、キリスト教徒間の対立を避けるために、『ナルニア国物語』の中に福音主義とは相容れないものがあったとしても議論的にしないというのは、いかにも福音主義者らしくない。妥協は彼らの望むところではないからである。

もう一つの可能性としては、『ナルニア国物語』の中に異教の要素がある点について議論するよりも、他に優先事項があった、すなわち、対決すべき他の敵があったからではないかというものである。それは、『ナルニア国物語』からキリスト教色をとってしまおうと企てる自由主義者との戦いである。事実、聖書主義的価値観を、映画などを含む娯楽産業に呼び戻そうというミッションを掲げ、インターネット上にサイト<sup>21)</sup>を運営する Baehr らは、『ライオンと魔女』映画化の前から、原作に見られるキリスト教色が取り去られることのないようにと主張していたし<sup>22)</sup>、映画が公開された後でも、映画が原作のキリスト教色を忠実に描ききっていないとコメントを出している<sup>23)</sup>。『ナルニア国物語』からキリスト教色を取り去れば、後には高い倫理観と道徳心のみが残る。すなわち、『ナルニア国物語』ヒューマンズ版となるわけであるが、神は要らない、人間が努力してこの世を良くするのだとするヒューマンズは、福音主義が常々批判の対象としてきたものであるから、『ナルニア国物語』からキリスト教色を無くす動きについて福音主義者が異を唱えるのは、彼らにとっては当然なことといえよう。しかしながら、ここでも腑に落ちないのは、リベラルの系譜に属するもの、すなわち、ヒューマンズや、フェミニスト神学、解放の神学等には敏感に反応する福音主義者たちが、『ナルニア国物語』に見て取れる包括主義 — これもリベラル派の流れに属するのだが — について、なぜ同じように批判の声を上げないのか、という点である。

Michael White はその著書『ナルニア国の父 C.S. ルイス』の中で、「ピュー

リタンのクリスチャンたちが・・・実像とはほど遠い、いうならば消毒ずみのルイス像を世界に提供しようとやっきになっている。・・・ルイスの著書から飲酒と喫煙への言及をことごとく払拭しようという試みがなされているという<sup>24)</sup>と非難している。もしや、福音主義のキリスト教徒たちは、飲酒や喫煙といった行いの面だけでなく、信仰の面でも、C.S. Lewis をステレオタイプの福音主義者のように扱おうとしているのだろうか。だとすれば、そのような試みは無謀であると言わざるをえない。包括主義的な立場に加えて、キリスト教に対するアプローチが弁証的であるなど、彼の信仰には自由主義神学的な側面があることは疑いようがなく、C.S. Lewis を「ただたんに保守的福音派の擁護者とみなすことは早計」<sup>25)</sup>である。一方、C.S. Lewis の回心記には、彼が根底から神によって変えられたことが比喩的ながら明記されており<sup>26)</sup>、その点では、彼を福音主義的だとすることには何ら問題もないだろう。従って、C.S. Lewis の諸著作は、福音主義的であると共に自由主義的でもある彼の両義性を反映したものであると捉えるのが、バランスの取れた接近法であるはずである。C.S. Lewis の著作から、飲酒や喫煙の言及を消し去ろうという試みと同様、彼の信仰のありかたから自由主義神学的な要素を取り去ろう（あるいはそれらについては沈黙しよう）とする動きが福音主義者たちの間に、万が一つでもあるとするならば、それは、『ナルニア国物語』とその筆者のありのままの姿を直視していないという点で、『ナルニア国物語』からキリスト教色を取り去り、ヒューマニズム版『ナルニア国物語』を作ろうとするリベラル派の試みと、何ら変わることはないとは言えまいか。

「すべてを吟味して、良いものを大事にしろ」<sup>27)</sup>という聖書に従い、C.S. Lewis の信仰上の立場の一部を見過ごすことなく、全てをありのままに吟味することができるのか。『ナルニア国物語』作品の一連の映画化は、聖書中心主義を自認する福音主義者たちが試されるきっかけとなるであろう。その点で、『ナルニア国物語』に関する議論もハリー・ポッターシリーズと同様、アメリカ

におけるキリスト教徒たちの信仰のあり方を理解する上で、興味深いものとなるだろう。

## 注

- 1) [http://www.disney.co.jp/narnia/shell\\_content.html](http://www.disney.co.jp/narnia/shell_content.html) (2007年3月2日現在)
- 2) 加藤 (2005) を参照。
- 3) ハリー・ポッターシリーズには、キリスト教的な要素が含まれるとするキリスト教徒もいるが、Ted Baehr と Tom Snyder 共著 *Frodo & Harry — Understanding Visual Media and Its Impact on Our Lives* の p.196 では、ハリー・ポッターシリーズをキリスト教的だとする John Granger 著 *The Hidden Key to Harry Potter* は現代オカルティズムの父である Manley P. Hall の著作に似ているとして、Granger の主張を退けている。また、Richard Abanes 著 *Fantasy and Your Family* p.241 でも、ハリー・ポッターシリーズを好意的に見るキリスト教徒に対する批判が述べられている。
- 4) 神宮輝夫 「冒険とファンタジー—おもしろいがいちばん」『朝びらき丸 東の海へ』 p.365、1.2- 4
- 5) C.S. Lewis 『銀のいす』 p.21
- 6) C.S. Lewis 『子どもたちへの手紙』 p.161 1.6 - 9
- 7) 同 1.6 - 9
- 8) *Fantasy and Your Family* p.245 - 249 で は、Elizabeth Schafer 著 *Beacham's Sourcebooks for Teaching Adult Fiction: Exploring Harry Potter* と Beacham's online companion Web site を紹介している。
- 9) 加藤 (2005)。
- 10) *Fantasy and Your Family* p. 154 1.11 - 13
- 11) 『キリスト教の精髓』 p.71 1.6 - 8
- 12) 同 p.92 1.14 - 16
- 13) 竹野一雄 『C.S. ルイスの世界』 p.12 1.13

- 14) 同 p.274 l.13 -14
- 15) ただし、『キリスト教の精髓』 p.113 l.13 - p.114 l.3 では、C.S. Lewis は、キリスト教を知らない人々が救われるかどうかは、神は聖書で何も語っておられないので、われわれにもわからない、としている。
- 16) 『ニューエイジの罨』 p.95 l.11 - 15
- 17) 同 p.94 l.12 - p.95 l.4 によれば、現在のカトリックも、この立場に近い。
- 18) 同 p.101 l.9 - 11
- 19) *What's a Christian to Do with Harry Potter?* P.8 l.16 -l.17
- 20) 同 p. 7 l.15 - l.22。ただし、Neal は、最終的には、ハリリー・ポッターシリーズについての判断は個人に任せるべきものだとしている (同 p.9 l.16 - l.23)。
- 21) <http://www.movieguide.org/index.php?s=aboutmovieguide> (2007年3月2日現在)
- 22) <http://www.movieguide.org/index.php?s=articles&id=76> (2007年3月2日現在)
- 23) <http://www.movieguide.org/index.php?s=articles&id=83> (2007年3月2日現在)
- 24) 『ナルニア国の父 C.S. ルイス』 p.319 l.14 - p.320 l.1
- 25) 『C.S. ルイスの世界』 p.55 l.17 - p.56 l.1
- 26) 『喜びのおとずれ』 p.295 l.7 には、「扉を開こう、鎧を脱ごう、身を任せようという気になった」こと、そしてそれから「わたしは自分のことを、やっと溶けはじめた雪だるまのように感じた」(同 l.13)、とある。更に、C.S. Lewis は、神は愛であること (同 p.300 l.8 - p.301 l.3)、C.S.Lewis 自ら罪びとであること (同 p.297 l.14 - l.17) イエス・キリストの福音 (十字架上の死と復活) は現実のものであること (同 p.309 l.12- l.14) を確信していた。
- 27) 聖書テサロニケ人への第一の手紙第 5 章 21 節

## 参考文献

- Abanes, Richard (2002) *Fantasy and Your Family*. Camp Hill.:Christian Publications, Inc.

- Baehr, T. and T. Snyder (2003) *Frodo & Harry — Understanding Visual Media and Its Impact on Our Live*. Wheaton: Crossway Books.
- 神宮輝夫 (1985) 「冒険とファンタジー—おもしろいがいちばん」『朝びらき丸 東の海へ』
- 加藤知子 (2005) 「『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』をめぐる、キリスト教徒間の議論についての覚書」『星城大学人文研究論叢第1号』
- Lewis, C.S. (1950) *The Lion, the Witch and the Wardrobe*. HarperCollins Publishers Ltd. [C.S. ルイス 『ライオンと魔女』 瀬田貞二訳、岩波少年文庫、1985年]
- Lewis, C.S. (1952) *Mere Christianity*. London: Geoffrey Bles Ltd. [C.S. ルイス 『キリスト教の精髓』 柳生直行訳、新教出版社、1977年]
- Lewis, C.S. (1952) *The Voyage of the Dawn Treader*. HarperCollins Publishers Ltd. [C.S. ルイス 『朝びらき丸 東の海へ』 瀬田貞二訳、岩波少年文庫、1985年]
- Lewis, C.S. (1953) *The Silver Chair*. HarperCollins Publishers Ltd. [C.S. ルイス 『銀のいす』 瀬田貞二訳、岩波少年文庫、1986年]
- Lewis, C.S. (1954) *The Horse and His Boy*. HarperCollins Publishers Ltd. [C.S. ルイス 『馬と少年』 瀬田貞二訳、岩波少年文庫、1986年]
- Lewis, C.S. (1956) *The Last Battle*. HarperCollins Publishers Ltd. [C.S. ルイス 『さいごの戦い』 瀬田貞二訳、岩波少年文庫、1986年]
- Lewis, C.S. (1959) *Surprised by Joy*. Fontana Books. [C.S. ルイス 『喜びのおとずれ C.S. ルイス自叙伝』 早乙女忠／中村邦生訳、筑摩書房、2005年]
- Lewis, C.S. (1985) *Letters to Children*. New York: Macmillan Publishing Company. [C.S. ルイス 『子どもたちへの手紙』 中村妙子訳、新教出版社、1986年]
- 水草修治 (1994) 『ニューエイジの罨』 CLC 出版。
- Neal, Connie (2001) *What's a Christian to Do with Harry Potter?* Colorado Springs: WaterBrook Press.
- 日本聖書協会 (1990) 『聖書』 新共同訳。
- Rowling, J. K. (1997) *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury.

Rowling, J. K. (1998) *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury.

竹野一雄 (1999) 『C.S. ルイスの世界—永遠の知恵と美』 彩流社。

White, Michael (2005) *C.S. Lewis — The Boy Who Chronicled Narnia*. London: Little,

Brown and Company Publishers. [マイケル・ホワイト 『ナルニア国の父 C.S. ルイス』 中村妙子訳、岩波書店、2005年]